

文部科学省博士課程教育リーディングプログラム

筑波大学グローバル教育院 エンパワーメント情報学プログラム

外部評価（令和元年度実施） 評価結果



令和元年 6 月

目 次

I. 外部評価の実施にあたって

- (1) 外部評価の目的
- (2) 外部評価の経緯

II. プログラム全体の総合評価

III. 今後の展望への期待等意見

I. 外部評価の実施にあたって

(1) 外部評価の目的

エンパワーメント情報学プログラムは、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮し、人をエンパワーするシステムをデザインできるグローバル人材を養成する、5年一貫の博士課程学位プログラムである。平成25年度、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択された。

本プログラムが外部評価を実施する目的は、プログラムによる自己点検評価の実施後、外部の有識者による検証を行うことで、プログラムの活動の現状と課題を明らかにし、教育の質の向上を図ることにある。

(2) 外部評価の経緯

博士課程教育リーディングプログラムに採択されたプログラムは、採択後4年目に中間評価、7年目に事後評価を受けることになっている。評価は、博士課程教育リーディングプログラム委員会の部会長会議及び類型別審査・評価部会において実施される。

本プログラムは、平成28年度に中間評価を受けるにあたり、平成27年度及び平成28年度の外部評価は、中間評価に際して日本学術振興会に提出する中間評価調書に沿って項目を設定し、実施することとした。平成29年度及び平成30年度は、中間評価後となるため、中間評価調書に沿った項目を設定するのではなく、外部評価委員の自由な観点から総合的に評価していただく事とした。また令和元年度は、本プログラムの最終年度に当たることから、7年間を総括して総合的に評価していただいた。

実施体制は、「エンパワーメント情報学プログラム外部評価実施要項」(平成27年5月22日、エンパワーメント情報学プログラム運営委員会決定)に基づき、平成27年7月より、産業界、学界の有識者5名を外部評価委員として委嘱した。

今までに、第1回外部評価委員会は平成27年11月25日(水)、第2回は平成28年8月5日(金)、第3回は平成29年7月25日(火)及び7月27日(木)、第4回は平成30年7月25日(水)に、筑波大学エンパワースタジオにて開催してきた。第5回は、令和元年5月20日(月)に、原島博委員、岩野和生委員、土井美和子委員、鈴木教洋委員にご来学いただき、同所にて開催した。

なお、この外部評価委員会は、評価委員のご負担を考慮し、文部科学省からのプログラムに対する資金的支援が終わる今年度をもって一旦終了とする。今までご協力いただいた評価委員各位には、心より感謝申し上げます。しかし、このプログラムは引き続き継続することから、次年度以降に改めて外部評価委員会を設置する予定である。

本稿は、第5回外部評価委員会開催後、各委員による外部評価コメントシートの記載内容をまとめたものである。

令和元年6月
エンパワーメント情報学プログラム
外部評価委員会事務局

Ⅱ. プログラム全体の総合評価

7年間にわたる本教育プログラムの取り組みは、博士課程教育リーディングプログラムとしては計画通りに順調に進められ、期待以上の成果を挙げている。カリキュラムの整備、教員・連携体制、学生支援環境、修了生のキャリアパスの構築など、すべてにわたって当初の計画を上回っていると評価できる。この教育プログラムの特徴は、筑波大学大学院全体の改革ビジョンのなかで明確な位置づけが行われており、その先導的な役割を果たしてきたことである。その意味でも、本プログラムはまさに時宜を得たものと言えよう。

これを可能にしたのは、何と言っても関係する先生方ならびに事務の方々が、意欲的に取り組んできたからである。本外部評価委員会も今回も含めて5回開催されたが、そこでの指摘事項に対しても真摯に対応されており、関係者の労を多としたい。

この7年間にわたり精力的にプログラムを計画し実行してきたことを評価したい。積極的な学生も育ち、今後この分野が根付かせていくことを期待したい。

プログラム後半に議論になったが、「エンパワーメント情報学」とは何かという主題を理論的、哲学的に掘り下げ、一つの学問分野に育て上げることはまだ道半ばといえるだろう。何をエンパワーするのか？そもそもエンパワーされるべきアイデンティティーは何か？そのエンパワーメントの方向性に対する価値観はなにか？それと科学技術の関係はなにか？この分野は、掘り下げようによっては深く今からの学問の在り方もしめしていくものだと思う。このプログラムが良いきっかけになればよい。その意味で、博士課程であるが、学生一人一人が深く考えること研究として新しい分野を開いていくことなどの風土醸成にさらに努力されるといいだろう。このプログラムの評価項目が少し細目にわたっているせいか、その細目を満たすことへのエネルギーが多であったようにも感ずる。これは今後のこのような競争的資金による運営について政府も大学も考えていかなければならないテーマだろう。

結論としては、所期の目標についてはきちんと達成された。しかし、本来の新しい学問分野醸成についてはまだ道半ばと感じる。

「エンパワーメント情報学」分野を立上げ、博士課程リーディングプログラムを通じて、7年間にわたり確実に成果を積み上げてきた点を高く評価したいと考えます。外部イベントにも積極的に参加し、著名な賞を受賞するとともに、自らも、ワークショップを含め、様々なイベントを企画、実施した点は、賞賛に値すると思います。外部評価委員会の機会に、多数デモを見せていただきましたが、「魅せ方力」が備わったデモになっており、大いに刺激を受けることができました。

また、海外からの学生を多数迎え、共に学ぶことにより、日本の学生のマインドセットも大きく変わったものと推察します。その甲斐もあり、修了者の就職についても、アカデミア以外の民間企業あるいは起業に羽ばたいていった実績につながったものと考えます。

さらに、「人間」の本質を捉えた「エンパワーメント」に向けた取組みに向けて人間情報学に関する哲学対話「サイエンスカフェ」を開始するなど、Society5.0のめざす「人のQoL向上」への貢献を期待しています。学生の方々には、社会が要請

する「価値」を多面的に捉え、ステークホルダーとの対話を通じて、新たなソリューション探索に結びつけて頂くことを望みます。

エンパワーメント情報学分野のカリキュラムを構築し、分野横断でかつ産官学にわたってグローバルなリーダーとなる人材養成の学位プログラムを実現した。

その成果の大きさは、アカデミア以外の就職が過半を超えること、また 2020 年度から筑波大学大学院が改組され学位プログラム制に移行することにより、実証されている。

外部評価の学生ヒアリングでも、分野横断でのプロジェクト実現による経験や身に付けた表現力がインターンシップでの有効性を、実感していることが確認できた。新たな分野と学位プログラムを構築することは教員にとっても大きな負担であったが、教員全員が一丸となって目標に挑戦したことが、若手教員の満足にもつながっていることもヒアリングにより確認できた。

Ⅲ. 今後の展望への期待等意見

本教育プログラムは、博士課程教育リーディングプログラムの事業終了後は、筑波大学全学の大学院改組を通じて、新たな学位プログラムとして整備される予定であると聞く。評者としてはむしろこの今後の発展に期待したい。それは、本プログラムが立ち上げたエンパワーメント情報学を中心とする新たな人間情報学へ向けた期待でもある。

いま科学技術はさまざまな意味で転機にきていると評者は考える。情報学も同様である。技術中心のこれまでの発展は、確かに生活を豊かにかつ便利にしたが、一方でそれが人間という聖域に近づくにつれて、いま一度見直しが必要な時期に来ている。エンパワーメント情報学も、単に補完・協調・拡張という次元に留まらず、人間の尊厳を前提に、より多面的な人間学として発展することを期待したい。

さらには、これを恒常的な学位プログラムとして整備するときは、いま一度初心に立ち戻った制度設計が必要になると考える。完璧なプログラムのもとでは、ともすれば学生は受動的になる。自らがしっかりとした哲学を持ち、明確なビジョンのもとに未来を切り拓く新たな時代のリーダー育成に向けて、学生自らが切磋琢磨する環境が構築されることを期待したい。それは当然ながら、これを担う教員にとっても持続可能な設計でなくてはならない。

上述したが、この重要な分野について更なる考察や研究をすすめられたい。また、卒業生のことを考えると縦のつながり、アカデミックキャリアとして戻ってこられる支えとなる存在をはぐくんでほしい。できればこのプログラム終了にあたって、残された挑戦などをまとめてほしい。

不確実性の時代と言われる中で、新たな分野を創生し、リーダシップを発揮するには、「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」に加えて、「構想力」が大事であると考えます。将来の社会像を描き、その社会に必要とされる「価値」を構想し、ステークホルダーとともに社会実装していくことが求められます。この「構想力」を養う教育をお願いしたいと思います。

また、プログラム創生から7年間が経ち、世界も大きく環境が変わっています。世界の他大学の新たな取組みもベンチマークしながら、常に最先端のプレゼンスを示すべく、新たな取組みを継続されることを期待します。

エンパワーメント情報学は、規模は小さくなるが、筑波大で継続されることは重要である。

今後はOB/OGのグローバルで分野横断なヒューマンネットワークを生かし、エンパワーメント情報学をさらに掘り下げてほしい。特に重要なのは見せ方ではなく、CPSで実空間と情報空間が混然一体となる中での人間の本質の普遍性と適応性をしっかり見極めたエンパワリングである。今後のさらなる発展を期待する。

これらの意見、指摘事項は、今後事業の定着・発展に向けて、筑波大学側で継続的に検討の上、改善に向けての適切な対応がなされることを期待する。

令和元年6月
エンパワーメント情報学プログラム 外部評価委員会
委員長 原島 博
岩野 和生
鈴木 教洋
土井 美和子
萩田 紀博